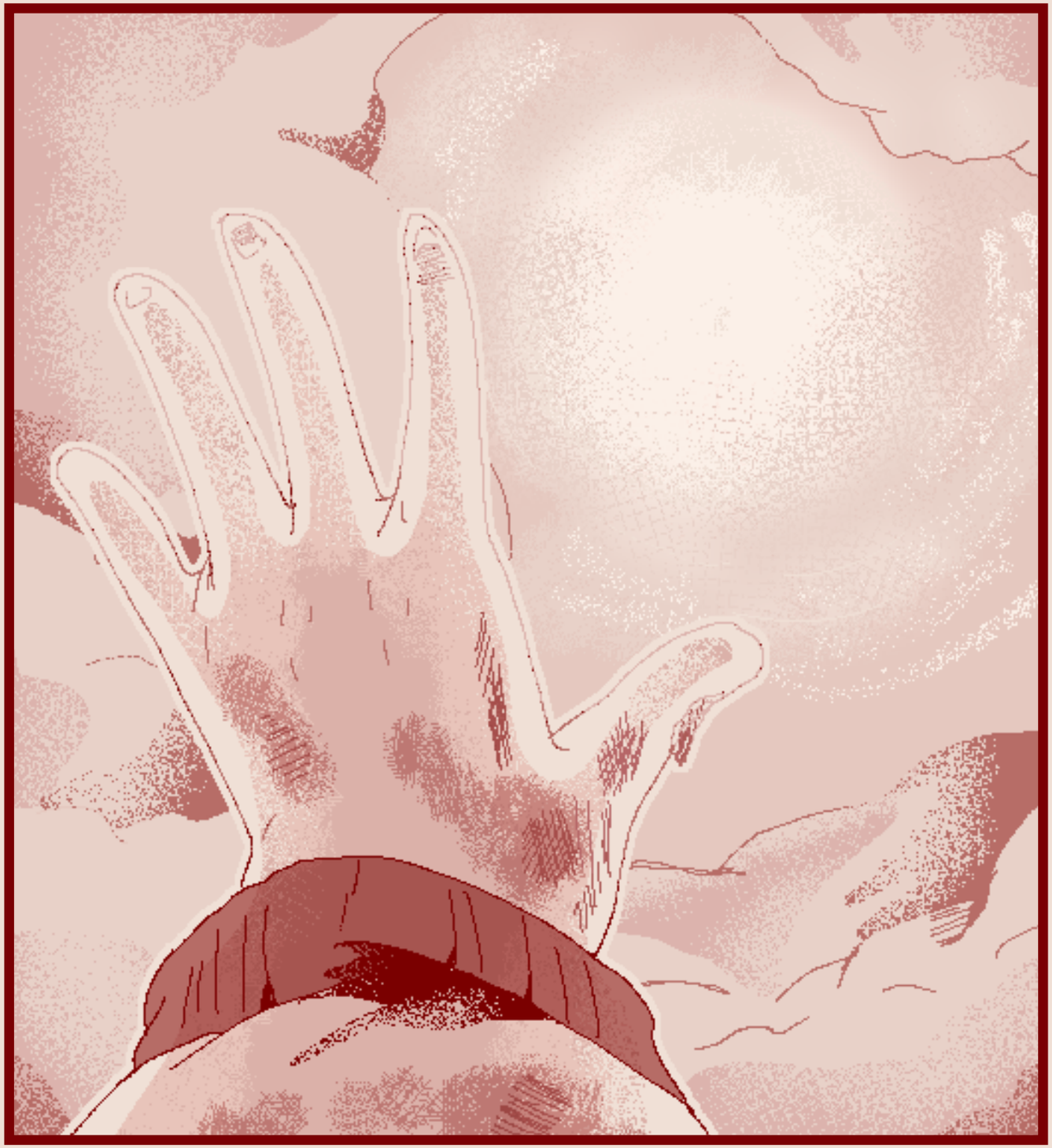


1

　ヴォ―ボモンがヴォルケニックドラモンに進化してから急に思い出した話がある。
　太陽へ…眩い光へ、蝋の翼で向かった愚か者の話。
　傲慢さを勇気と間違え光に手をの伸ばし、そして堕ちた。
　何故か、ずっと…頭から離れない。

「た…勇太！」
　ヴォルケニックドラモンの声で呆けていた頭が幾ばくかクリアになる。
「なにやってるんだ!?残った片手を空に向けて…！
　降り落されるよ！やっぱりどこか怪我を!?一度降りて…！」
「だい…じょう…ぶ。」
　視界がぼやける。
　手には、口…いや、喉か肺から出たであろう血がだらりと垂れている。
「ごめん…ヴォ―ボモン。」
「ゆ…うた？」
「ずっと、謝ろうと思ってんだ。
　君が、ラヴォガリータモンに進化した時から。」
　あれ？今…ヴォ―ボモンって言ったな。
「ずっと…空を飛びたいって言ってたのに…こんな…嫌な事ばっかりに飛ばせて…。
　飛ぶってきっと…もっと自由で…。」
「…そんな事か…、いいんだよ勇太。
　本当は、飛ぶなんてどうでも良かったんだ…。
　ずっと嫌だった…自分に胸が張れるようになりたかっただけなんだ…でも、光とデビドラモン…みんなと会って…会わせてくれて…勇太が隣に居てくれた　。
　それが僕の空だったんだ…。」
「…。」
「ねぇ…勇太、なんで…今。」
　分からない…ただ。
「…きっとこれが最期だから…。」
「勇太…それは。」

　どっちの…。

2

「…やはり、そうなのか。」
　インペリアルドラモンP・Mの割れた雲の中から白い羽を持った天使の軍団が姿を現す。
「アンティラモンあれは…。」
「今更、助けに来た訳じゃないよね？」
「…。」
　アンティラモンは、ゆっくりと立ち上がる。
「みんな力を貸して欲しい。
　彼らは…いや、アレらは、オグドモンを手にするつもりだろ。
　そうしたら、光もデビドラモンも永久に開放されない。
　勇太達の話を鑑みるに…アレらの目的は…世界の掌握。
　人間の誘拐を続けていたのなら…DWもMWも関係ないだろうな…。」
「知らなかったのか？」
「分からない…聞いてはないが、こうも露骨に答え合わせをされると思い当たる節もある…。
　だが…そうだな…信じたくなかった。
　友と思っていた…。」
「…。」
「ちょっと待て！？なんで私も戦う事になってんだよ!?私は、デーモンのジジイが死ぬ前に殺りに来ただけだ！てめえらの仲間になった覚えはねえぞ！
　正直、天使とか鼻くそくらいどうでもいいぞ!?あいつら偉そうな割に戦闘経験救ねえし、編隊ばっかでシステマチックに来るから全然楽しくねえんだぞ!?」
「あら？お天使には、臆病風吹かせますのね？」
「ああ!?はぁああ!?？婚活女！てめえぶっ殺すぞ！」
「どっちみちありゃあ、ここを包囲しようとしてるぜ。
　逃げたくても…おっと上手く尻尾巻いて…おっと。」
　クロウのニヤニヤした顔にベルスターモンが完全に乗せられていた。
「やったろうじゃねえか！天使なんてどいつもこいつも気に入らねえんだ！全員焼き鳥にでもしてやらあ！」
（びっくりするぐらいちょろいな…。）

「やはり…そちら側に付くのですね…ケルビモン様。
　いや、獣が…。
　ずっと…ずっと殺してやりたかったぞ。
　獣臭かったんだよお前。」

「…すまない。
　皆んな行くぞ!!!」

3

「！…ヴォルケニックドラモン！」
「なっ!?」
　オグドモンから芋虫やミミズの様にうねるオグドモンの顔が付いた触手がヴォルケニックドラモンへ向かって来る。
「不味い！一回旋回しないと！」
「いや、最短距離で行く！
　こいつらもこの道が最短距離なのが分かってるからここで妨害してるんだ！」
「分かるの!?」
「一度、デビドラモンとジョグレスしてるんだ！勇太とデジヴァイスで繋がって分かった！
　繋がりを感じるんだ！ここが最短距離！コア（ガルフモン）への道だ!!」
「！分かった…一気に行…っ!!!」
　活き込んだ瞬間、勇太は口から吐血した。
　血を吐いた事で頭から血が抜けたのか勇太は自身の現状をようやく明確に理解した。
（心臓が早鐘のように鳴ってる…！寒くないのに手の震えが止まらないし、よく見ると視界が赤い!?…血…！
　興奮状態なのに力が抜けてる感じ…！
　デジソウルが…力が枯渇してるのか…!?）
「っ…！」
「勇太!!？」
「…それがどうしたあああああああああああああ!!!！」
「！っヴォルケニックフレアあああああああ!!!!!」
　口から噴き出した灼熱の炎がオグドモン達を吹き飛ばす。
　そこには道が広がっていた。
「行くぞ!!!ヴォルケニックドラモン!!!」

　通路は、無機物のように見えるが有機物、生物の内臓のように蠢いていた。
　通路からはデーモンの部下のデジモン達が向かって来た。
「よくも!!」「デーモン様を殺した奴が!!!」
「ヴォルケニックドラモン！殺すな！相手は完全体と成熟期だ！ガルフモンとの戦闘にはついてこれない筈だ！
　コアまでいけば追ってこない!!!」
「分かった!!!グライドブレイズ!!!」
　ヴォルケニックドラモンの身体から炎を纏って回転し、デジモン達を吹き飛ばす。
　暫くの妨害を受けそして、

「見えた!!!コアだ!!!」

4

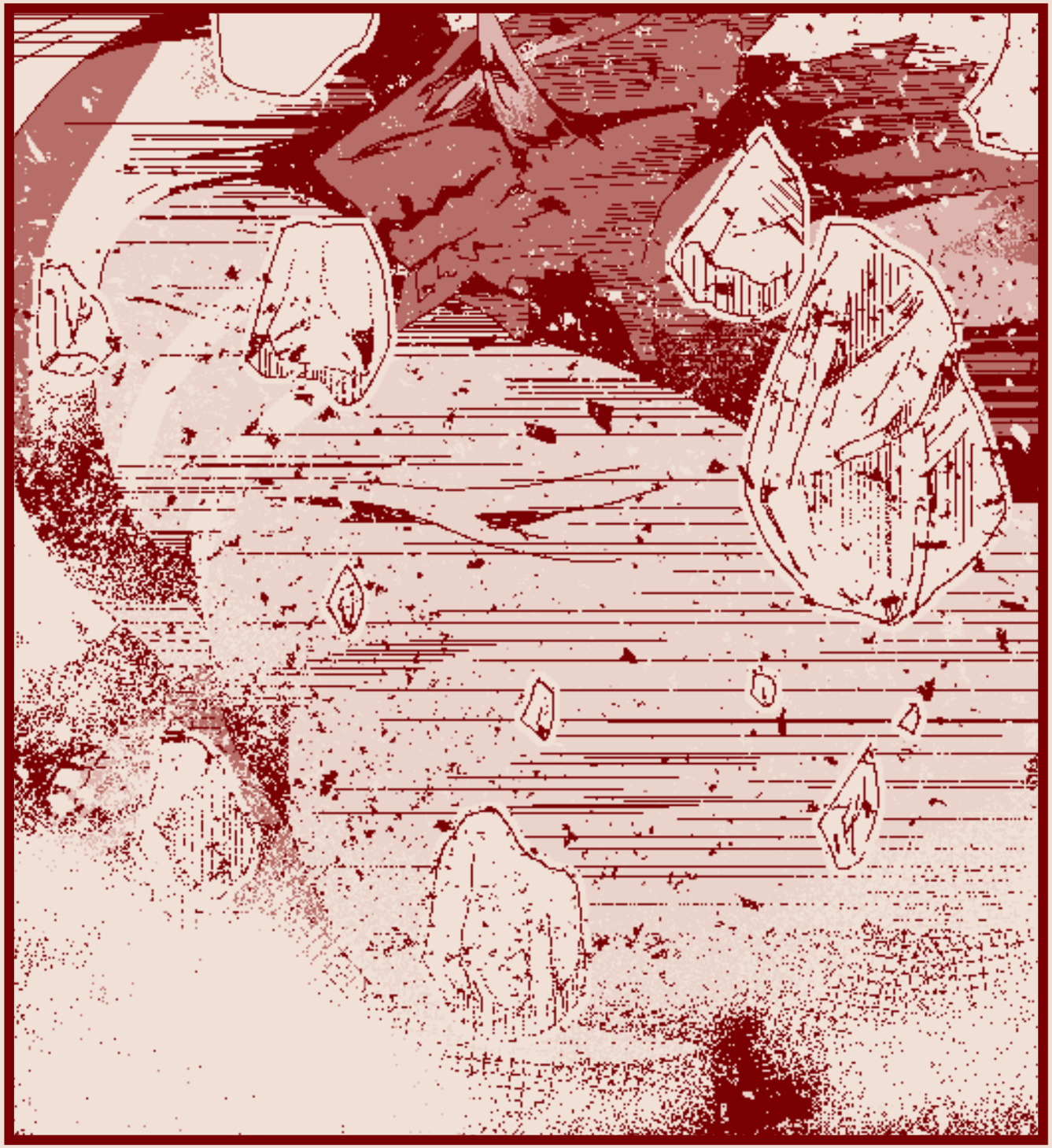
　勇太の目算通り、コア付近までデーモンの部下は追ってこなかった。
　先程までの怒声は病み、コア付近は静かに鼓動音だけが響いている。
「ここが、コア…。」
　血管や神経が大樹のような柱にこびりついてるような部屋であった。
　その中心に肉塊が強く鼓動していた。
　勇太達が肉塊に近づく事に鼓動が早まっていった。
「勇太…。」
「ああ…、褌締め直すよ！」
「「来る！」」
　鼓動が最高潮に達した瞬間、ガラスを掻き毟るような不協和音と獣の雄叫びが混ざった慟哭と共に肉塊を突き破るようにガルフモンが現れた。

5

　ヴォルケニックドラモンとガルフモンがゆっくりとお互い歩み寄り顔を突き合わせる。
「…。」「…。」
「帰って、ヴォ―ボモン、ゆうた。
　やっと…やっとあの醜い姿から…デビドラモンの身体から解放されたの…。
　だから帰ってえええええええええええええええええええええ!!!!!」
「おい…。」

6

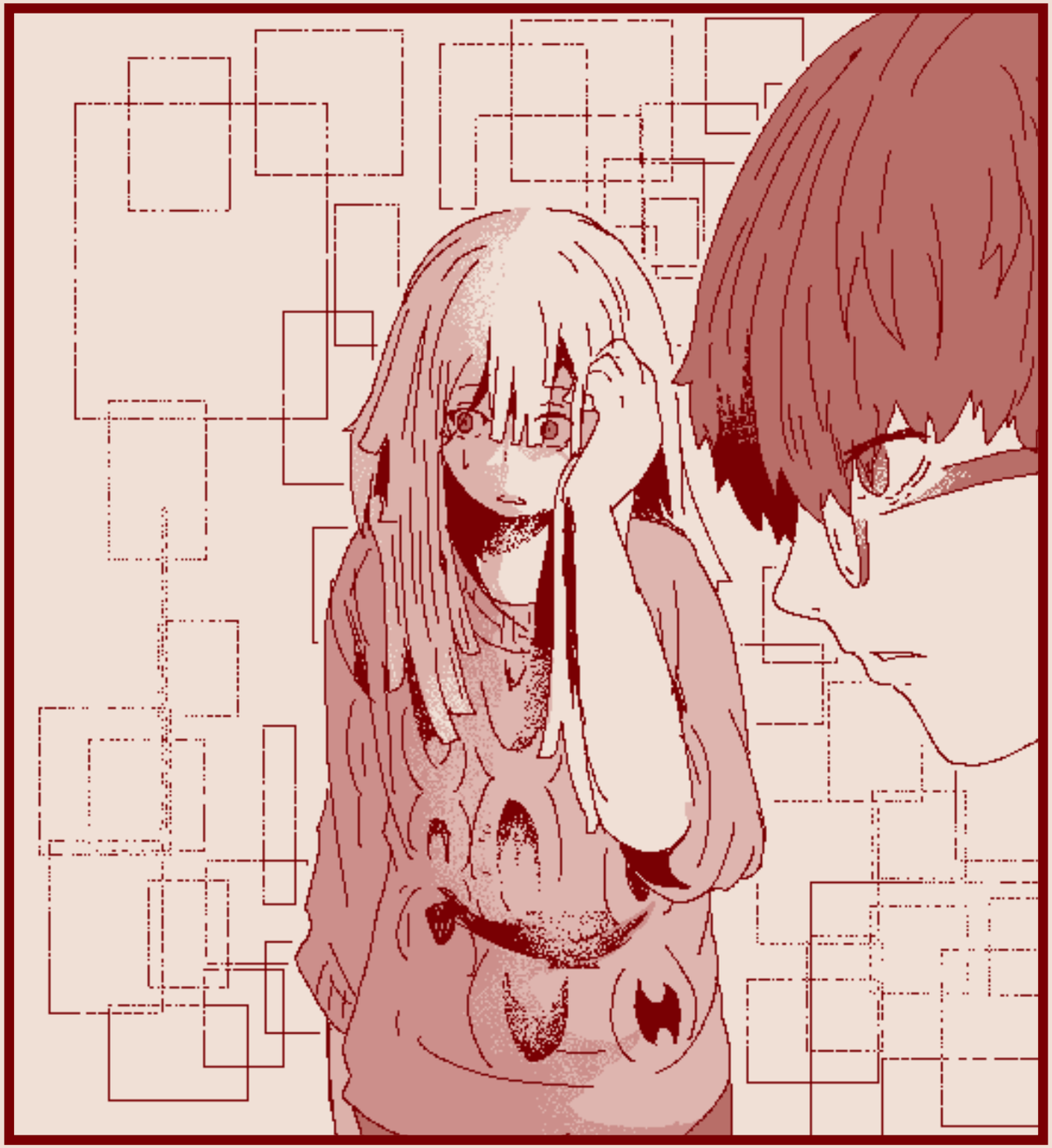
　ガルフモンの心臓が花弁のように開き、そこから体色が不自然に白くなった光が現れる。
　花弁は茎を伸ばすように触手を伸ばし、光の顔が勇太の目の前に来る。
「何しに来たの？帰ってよ？あんたなんていらないの顔も見たくない。
　私の肉壺にその幼い陰茎でも挿入れに来たの？
　私の世界に入って来ないで。」
「おい。」



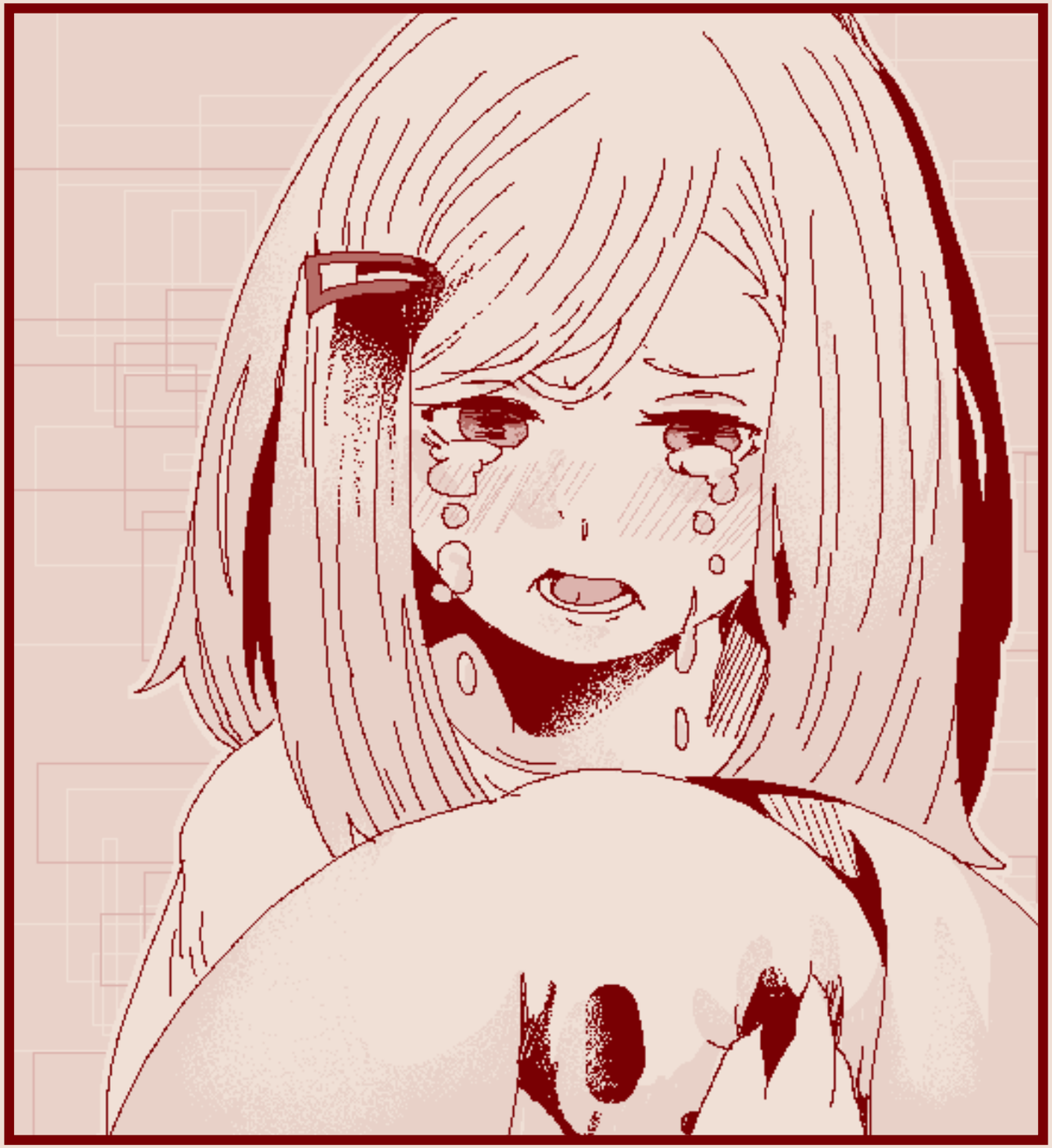
7

「「その不快なモノマネはやめろ!!」」
　勇太とヴォルケニックドラモンは、目の前にある光とガルフモンの顔を思い切り殴り飛ばす。
「ギャハハハッハ!!!！酷イジャナイ!!!陰茎ジャナクテ拳ヲ入レルナンテ!!!！」
「ふざけるな!!!デビドラモンはどんなになっても光から貰った姿を醜いなんて言わない!!!侮辱するな!!!
　それにな!!!デビドラモンは舌足らずなんだ！まねるなら真面目にやれ!!!」
「光が俺も知らない肉壺なんて難しい言葉知ってる筈ないだろ!!!！それにな!!お前の言葉からはよく知ってるタイプの悪意を感じるんだ!!!俺と…光が一番嫌いな、な！」
「勇太！デビドラモンと光の気配がこいつの奥から感じる！
　こいつ自体の気配はここに充満してるのと同じ！オグドモンだ!!!」
「なら！思いっきり殴れるな!!」
「ああ!!!」
　ヴォルケニックドラモンがガルフモンをそのまま壁へ叩き着ける。
　部屋全体が揺れ瓦礫が降り注ぐ。
　ふたりがその正体に気付いたのはテイマーとデジモンとしての成長もあったが、一番は今まで培ってきた時間と心、曰く愛であった。
「イヒヒヒヒヒ!!!酷イ！酷イ！酷イ！酷イ！普通殴レルカ！ソレニ!!!今ノハ嘘ジャナイサ!!!」
「なに！」
「私ガ二人ノ深層心理ヲ代弁シテルンダ！オ前達ノ声ハフタリニモ届イテル！特ニ人間ノ雌ニハナ！
　コレガコノ雌ノ本音ダヨ!!!」
「なんなんだ!?お前は!!!」
「デーモントカドウデモイイサ！唯世界ノ欲望ヲ！破滅ヲ見タイ!!!渡セルカ!!!コンナ面白イ玩具!!!悪魔モ天使モデジモンモ人間モ全部デ遊ベルンダ!!!コンナチンケナ街ナンテ比較ニナラナイゾ!!!！」
「分かりやすく気持ちい程、気持ち悪い悪役な台詞だな!!!」

（聞いてるんだな…光！）「なら、ヴォルケニックドラモン！」
「ああ、まかせろ!!!勇太!!!僕が届ける!!!」

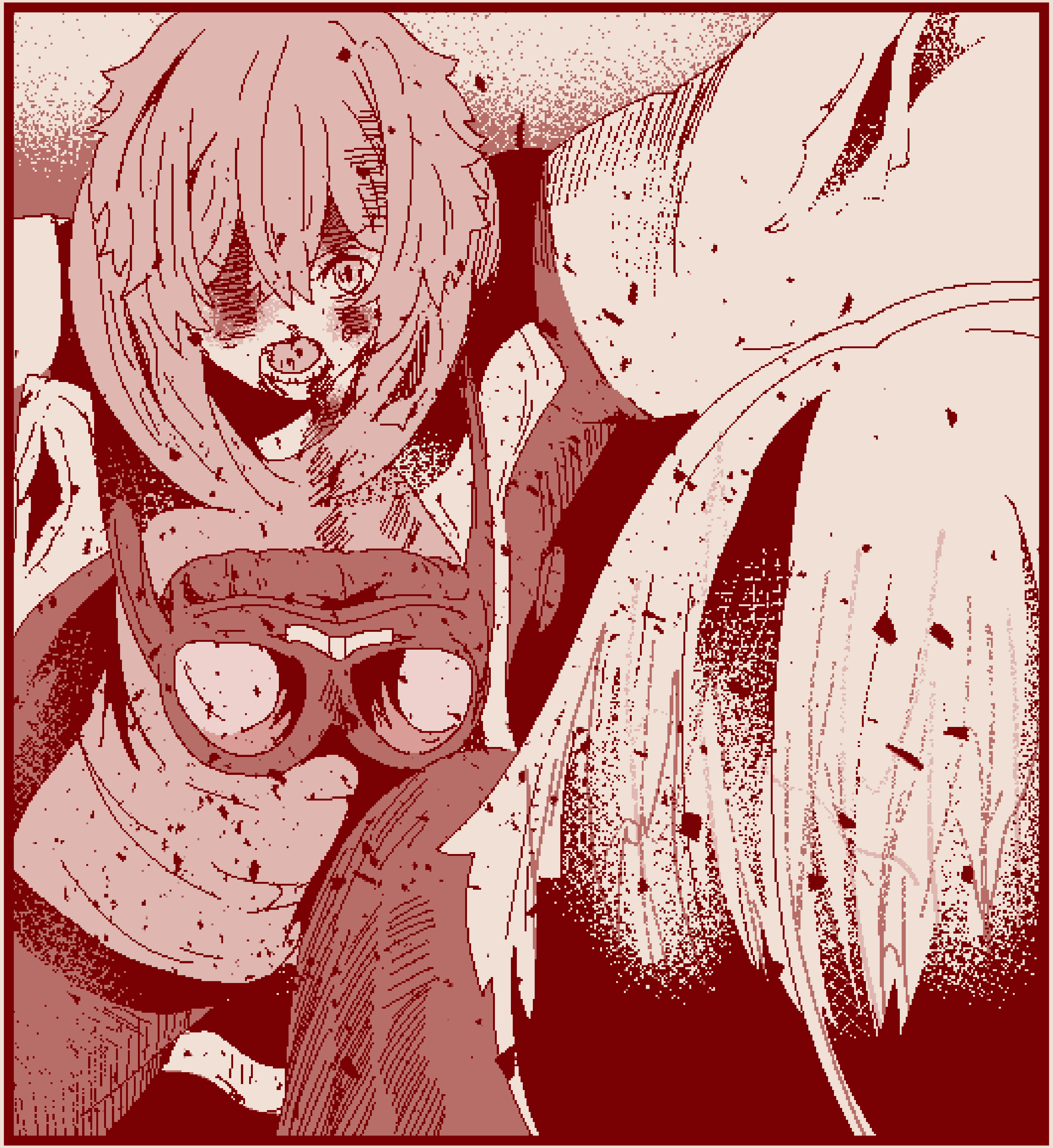


「どうして…ママまで…デビドラモン!!」
　父親の圭吾と対面していた空間に母親の秋子が現れる。
　その顔は、父親と同じように全ての情報を伝えられているものだった。
　そんな芸当が出来るのはこの空間では、光とあと、ひとりデビドラモンであった。
　光の呼びかけに、デビドラモンが正面に現れる。
　その目は、光を見据えていた。
　それは、今までの誰かの後ろに居た子ではなかった。
　それを感じ、光も一瞬だが動揺した。
「なんで…こんな事を。」
　秋子は情報に混乱したのもあり光に声を掛けようとするがそれを圭吾に止められる。
　圭吾は、ゆっくりと首を横に振り光達を見た。
「光が、かなしそうだったから…。
　デビドラモンをどれだけきらいになってもいい！
　これがいいことなのかもわからない！
　でも！光がのぞんだことでも！デビドラモンは光が、かなしむかおはみたくない!!!
　だって…デビドラモンは、光がすきだから。」
「…めろ…！やめろ!!!!!!！」
　光の叫び声と共にデビドラモンが掻き消される。
「黙れよ!!!！お前は…お前なんか!!!！」
「光！」
　秋子は、思わず叫んでしまった。
　記憶を見て、デビドラモンが光に取って大事な存在である事が分かっていたからだ。



9

　光は秋子と圭吾から貰ったぬいぐるみを抱きしめ、顔をうずめる。
「なんで!!!なんで!!!みんな否定するの!!!」
　顔を上げた光の顔からは大粒の涙と鼻水が出ていた。
「現実の世界に戻ってどうするの!?分かってる!!!間違ってるって!!!私の我儘で誰かが苦しんでる事も!!!
　でも、じゃあ、どうなるの!?パパはまた死んじゃう！ママは苦しみ続ける!!!！そんなの私は嫌!!!また皆んなで笑いたい!!!私の幸せは昔にしかないの!!!」



「今までだって心が苦しいのをずっと耐えてきた！」
（これは、オグドモンじゃない。
　光の自意識か？中で…闘ってるんだ！）
　ヴォルケニックドラモンを通じて勇太は、光のところへ駆けつける。
「でも、あんた達だっていつか私を見捨てるんじゃないの!?
　どんなに今が幸せでもいつかは…パパとママみたいに私を置いて！」
「そんな事ない!!!」
「分かってるのよ！でも、私が信じれないのは…私なの!!誰でもない!!私!!!
　未来なんて…私には！」
「なら、俺が…俺達が信じる!!!
　光が信じれるその時まで!!!俺は、傍にいる!!!」
「軽々しく言うんじゃないわよ！一生でも良いって言うの!!!？私があんたのものにならなくれも!!!離れても!!!それでも!?」
「関係ない!!!俺がそうしたいんだ!!!一生でも!!!どんな形でも…だって光が大事なんだから!!!笑ってほしい！幸せでいて欲しい!!!」
「じゃあなんで!!!邪魔するのよ!!!」
「こんな形じゃ幸せになれないからだ!!!光は優しいから!!こんな形で傷つけたひとを見ない振りして笑えないのを知ってるから!!!」
「あんたに…！なにが!!!」
「じゃあ、別れた時なんで泣いたんだよ!!!なんで今泣いてるんだよ!!!!!!」
「泣いて…る？」
　光の目には気付かないうちに、一筋涙が流れていた。
「今だ！勇太デジヴァイスを!!!！」
　デジヴァイスを見ると劇しい光が放たれていた。
　勇太はそれを光に当てる。
「帰ってこい!!!！デビドラモン!!!!!光!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

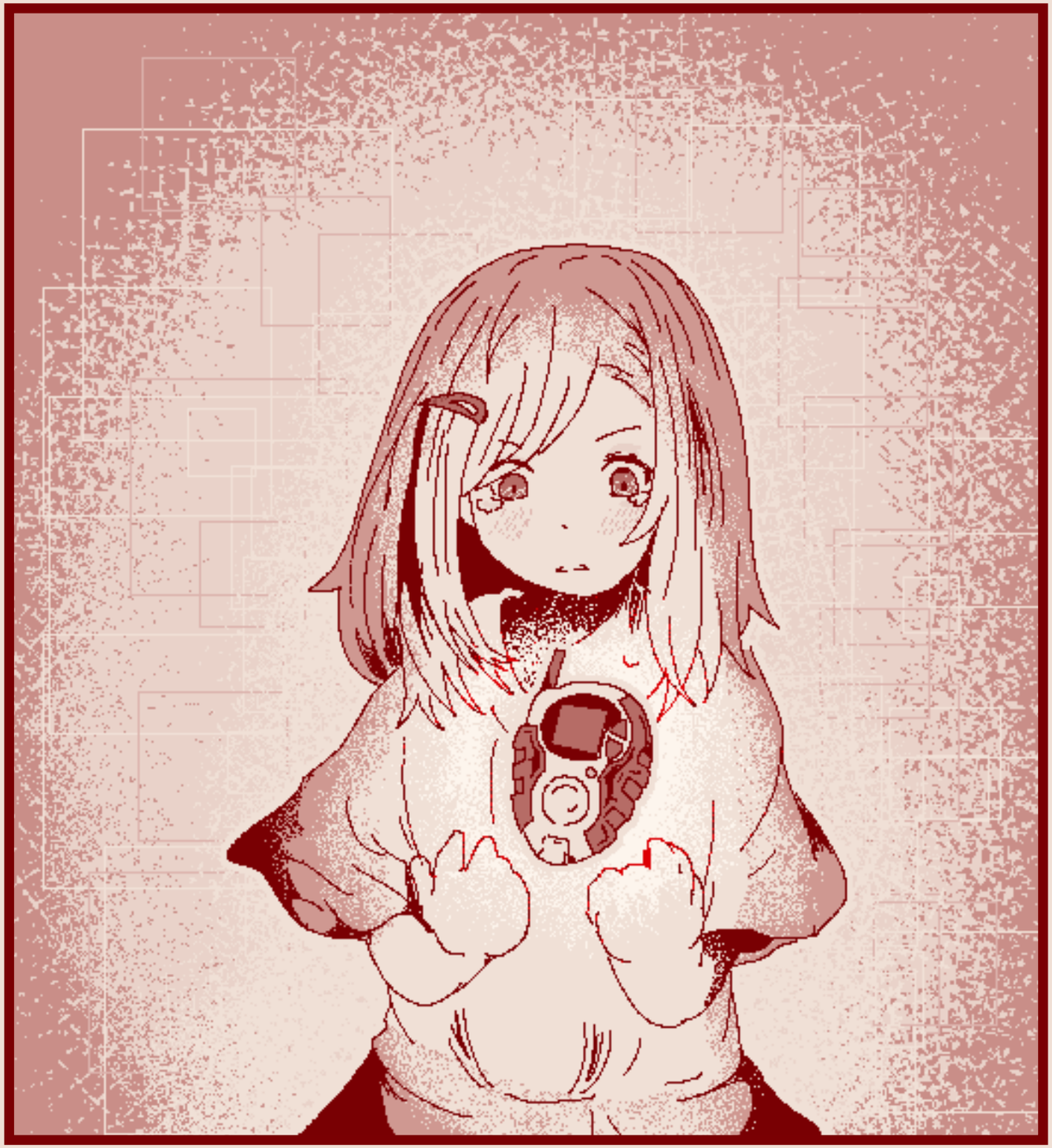
11

「ごめん…光。」
　圭吾は泣いている光を抱きしめ、それに次いで秋子も光を抱きしめた。
「ごめんなさい…光、私が…私があなたを苦しめて…。」
「…だからこれからも…。」
「でも…駄目だ光。
　きっとこれじゃあ…誰も幸せになれない。」
「じゃあ…どうすれば良かったの？」
「ねぇ光。
　本当に今幸せじゃない？」
「え？」
「君の記憶で見た…デビドラモン、ヴォ―ボモン、アンティラモン、サンドリモン…いっぱいの仲間。
　それに勇太君…全部が大事じゃなかった？」
「それは…。」
　光が後ろを見るとそこには、勇太達が笑っていた。
「…駄目。
　じゃあパパはどうなるの？ママは？」
　秋子はその言葉に過去を思い出した。
　父親を失った娘の心を言い訳に、自分の心が壊れるのを守るためにあの男に大事な筈の娘の心を蹂躙された。
　今だって、その傷は癒えず死人の様に生きている。
　だけど、思い出した…愛する夫と再び会い、娘の心を知った。
　この子は自分と比べてとても優しいだからこそこのままではいけない。
「ごめんね…光。
　ママが不安にさせちゃって…でも、大丈夫。
　光がくれたこの時間があるから…。」
「光…僕に時間をくれてありがとう。
　こうやってまた君を抱きしめさせてくれて。」
「パパ…。」
「大丈夫…僕は消えない。
　大事な思いでは、君の中にずっとある。
　それが…一番大切な事だよ。
　それがあれば、どんな道だって歩いて行ける。」

「…かり。」

　微かに光を呼び掛ける声が聞こえる。
　光は、思わず振り返った。
　そして、呼ぶ方から目が離せなかった。

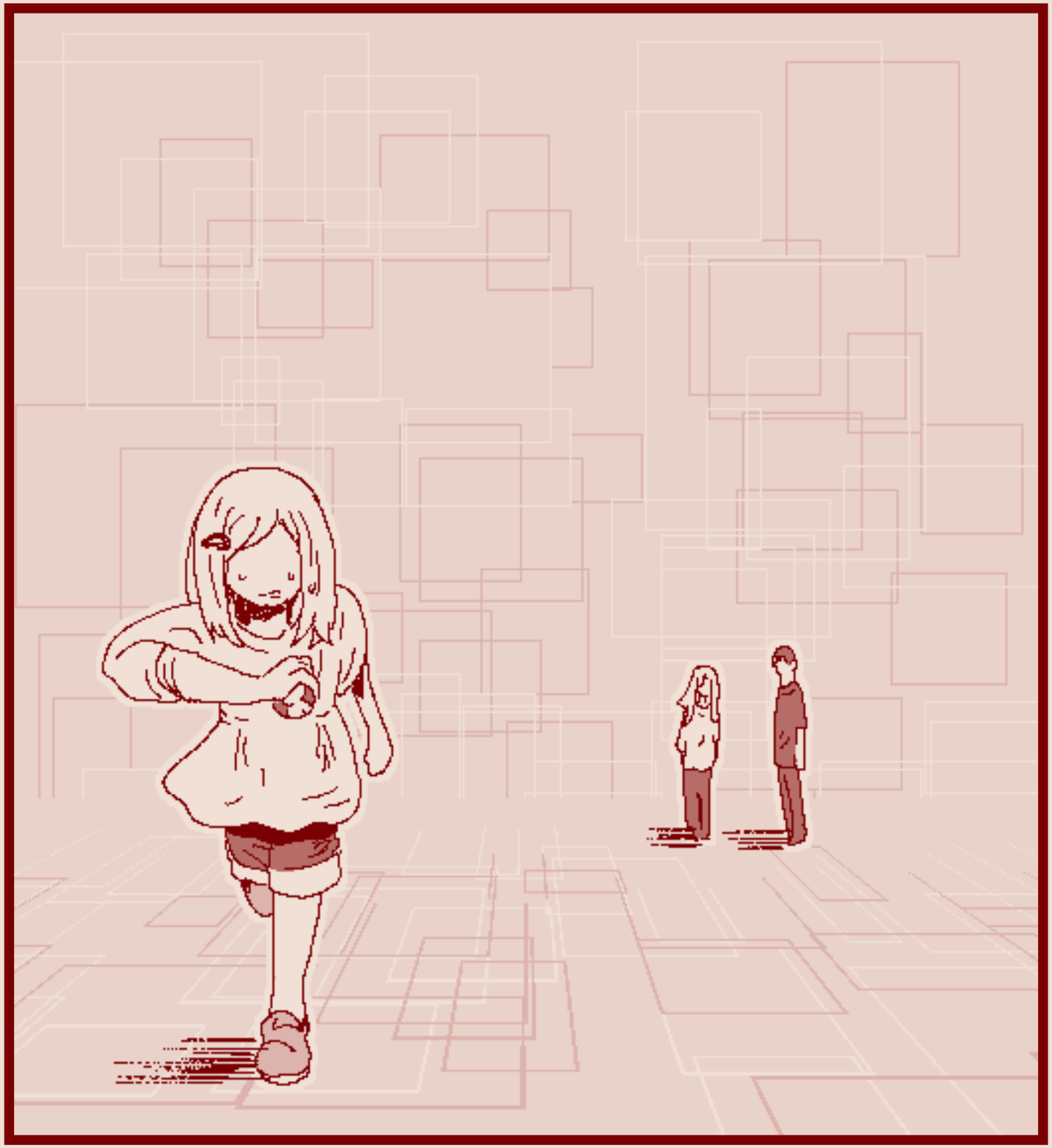
「それが、未来だよ光。」



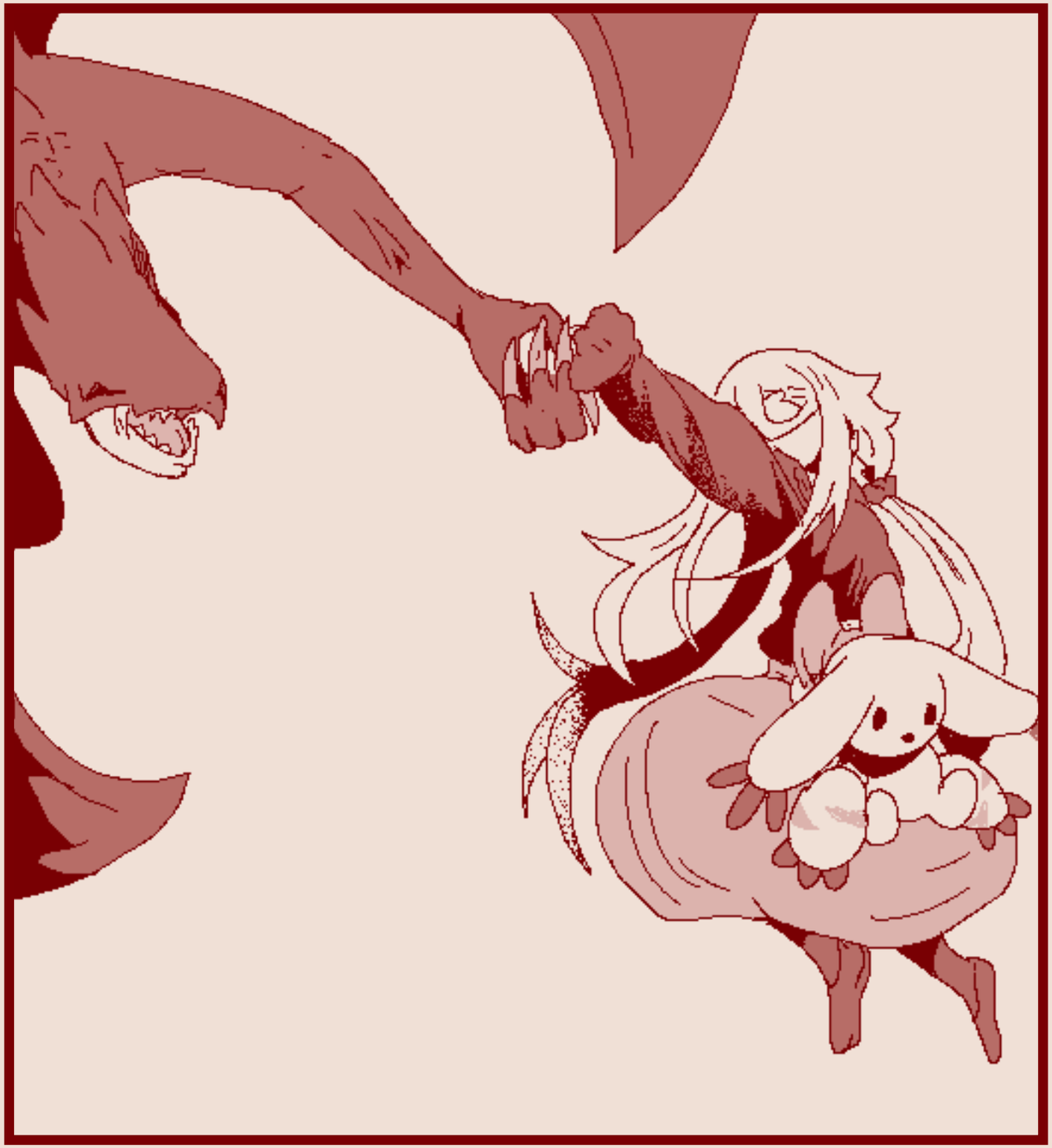
12

答えが光の心に示された。
その瞬間、輝きと共にデジヴァイスが現れる。
光はそれを怯えながらだが、力強く握りしめた。

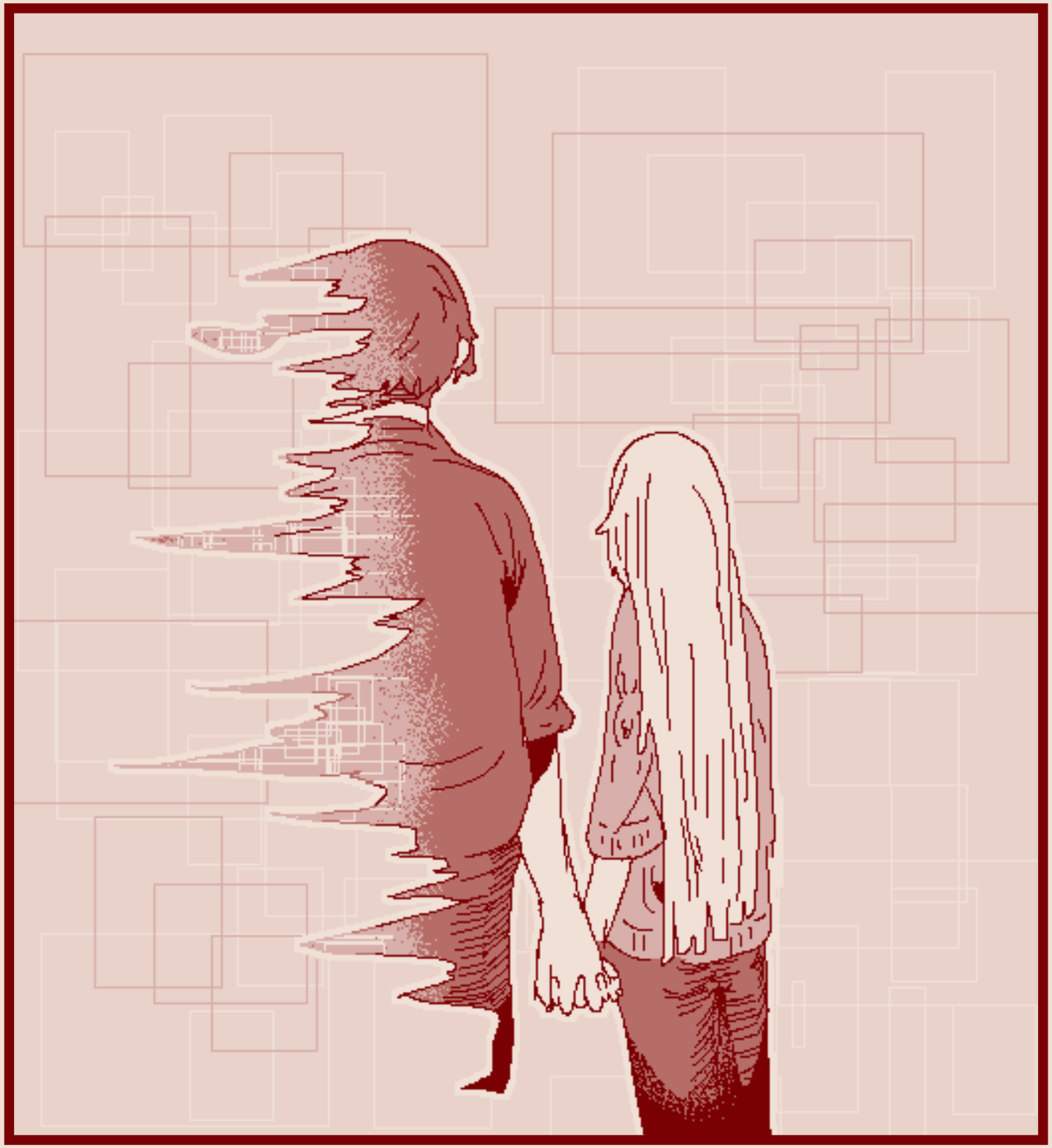
不安そうに光は、両親を一瞥した。
ふたりは優しく微笑み頷いた。
そして、
「「走れ！光!!!」」



その言葉に光は、声の方へ懸命に走った。
わき目も振らず、ただ真っ直ぐに光のように。

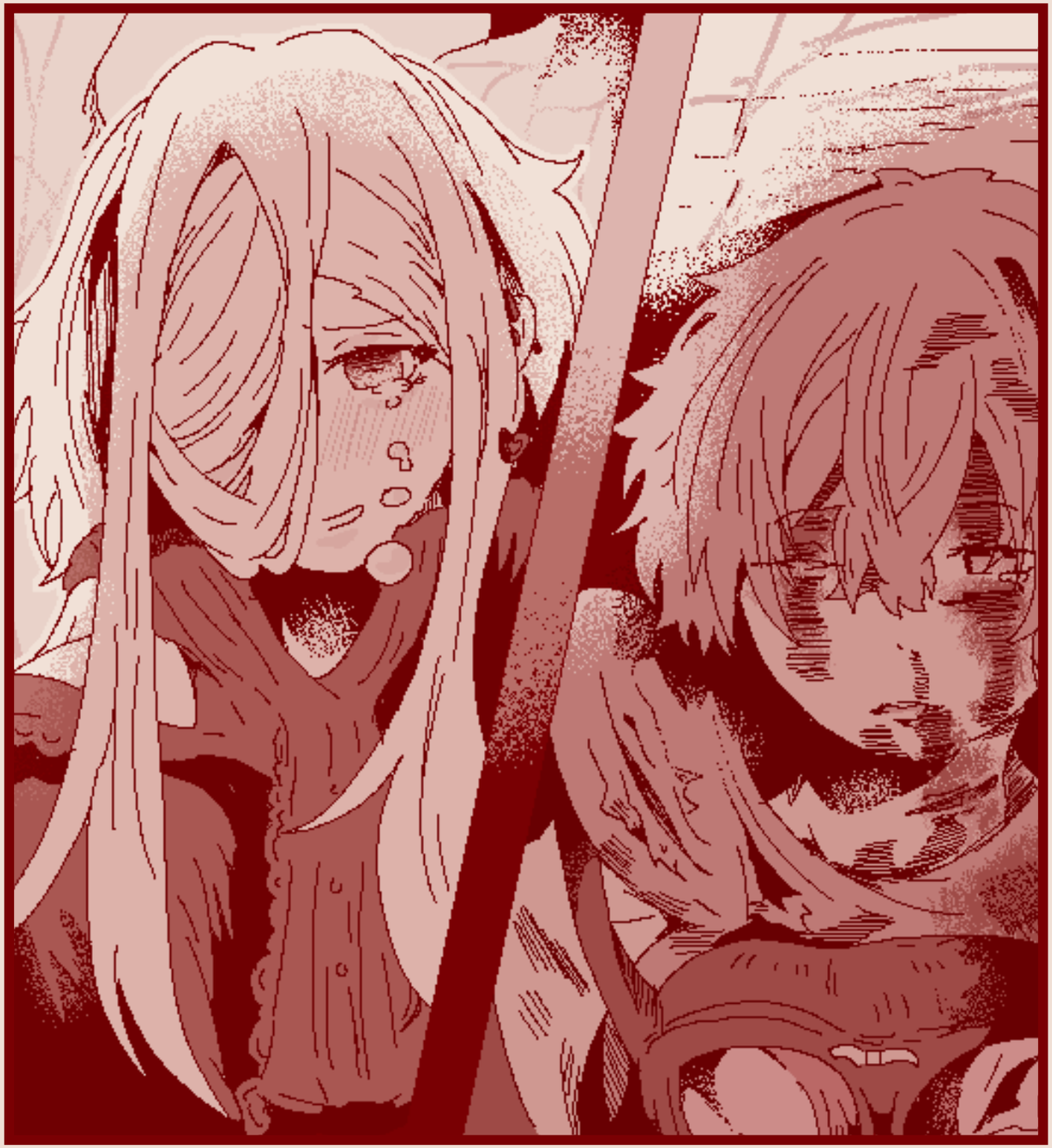


「光!!!！」
　走った先には眩い輝きが満ち、そこからデビドラモンが手を伸ばしていた。
「デビドラモン！」
　デビドラモンが伸ばした光の手をしっかりと握りしめ、そして引き寄せ手渡す。
　その先で光の手を掴んだのは勇太であった。
「…かり!!!！光!!!!!!!!!!!！」
「勇太!!!!!!!」
　勇太が光をしっかりと抱きとめる。
　そして、手渡したデビドラモンをヴォ―ボモンが手繰り寄せた。



16

　光が輝きの中に消えた瞬間から世界も徐々にその姿を崩し始めた。
　それと併せる様に圭吾の姿も霧散しはじめていた。
　その手を秋子はしっかりと握りしめた。
　手を握って分かったが、震えている。
　当たり前の事だが、再び死が訪れようとしているそれに対しての恐怖であると秋子は理解し、忘れるようにと強く握り返した。
「これできっと良かったんだよ。」
「そうよね…。」
「ごめんね…秋子さん。
　辛い思いばかりさせて。」
「…私こそ、ごめんなさい。
　圭吾に心配ばっかりかけて…でも、もう大丈夫だから…。
　光のために…もう絶対に間違わない。」
「…愛してるよ。
　これまでも、これからも…。」
「私もよ…。」
　そう言い残すと圭吾は霧散し消えて行った。
　残った秋子から最愛の夫の前では抑えていた涙がこぼれた。
　そして、輝きと共に MW へ帰還した。



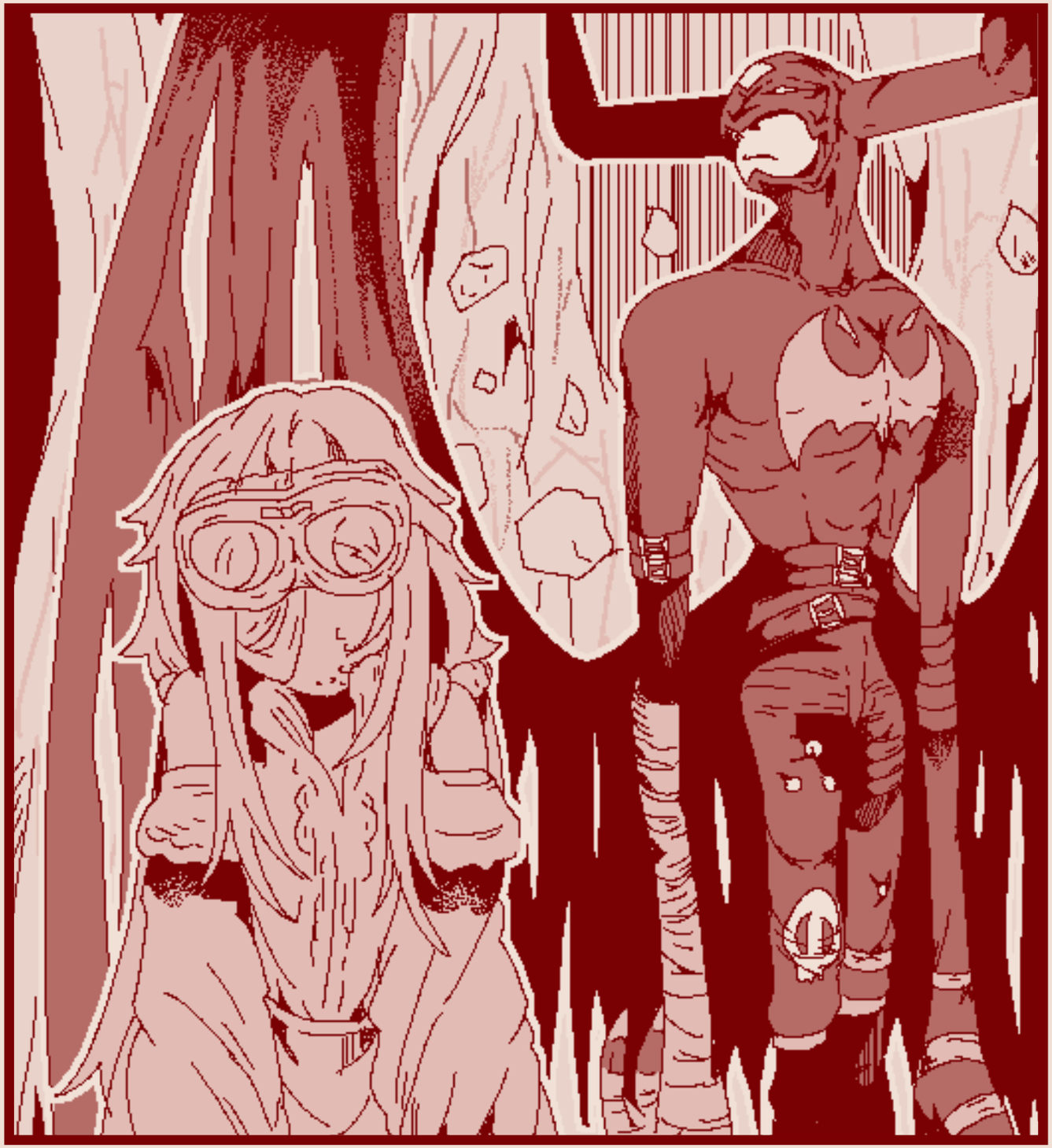
17

　太陽へ…眩い光へ、蝋の翼で向かった愚か者の話。
　傲慢さを勇気と間違え光に手をの伸ばし、そして堕ちた。
　何故か、ずっと…頭から離れない。

「ガ…ク…ソ…ツマンネ…エ。」
　光とデビドラモンがガルフモンから出た事により、ガルフモンはその中枢を失い、崩れ始めていた。
　そして、それに連動し、オグドモンも崩れはじめようとしている。
「…っ…。」
　連戦に続く連戦、そして選ばれていない筈の子供が無理矢理にもパートナーを幾度も進化をさせた事の代償が今支払われた。
　光を抱きしめ、引っ張り上げた時点で勇太は力を使い果たし、そのまま倒れ込んだ。
　勇太の命と結びついてるかのようにデジヴァイスはヒビが広がりそして割れていた。
　目からは力が消え、意識が薄くなり、声を出して光に呼び掛けようにも唇が僅かに動くばかりだった。
（なに…やってんだ…俺、今さっき…ずっと…そば…にって。）
　外部の情報も理解していた光は勇太の状況も把握できた。
　それが、どれ程の覚悟であったかも。
　だからそれを否定せず、涙は浮かべても無理矢理にも笑い、勇太の手を握った。
　僅かな時間であった。
　しかし、そでもれふたりは、先の約束をその僅かな時間でただひたすらに今に刻んでいた。
　力尽きたヴォ―ボモンをデビドラモンが優しく抱きとめ、その僅かな時間をふたりは、ただただ見守った。

18

　その惜しむ時間を勇太は別に手を動かした。
　力を振り絞りゴーグルを光の頭に掛けた。
　それを光はただただ受け入れた。
　勇太はそして弛緩する顔でなんとか笑顔を作り、
「――っ、ーー。」
　そして、力尽きた。
　もう、その顔には生きていた頃の表情はなく、弛緩した顔は別種のもの、死体としか言えないものになっていた。
　それを見届け、デビドラモン、ヴォ―ボモン、光は、輝きとなって霧散していく勇太をただ見守った。



19

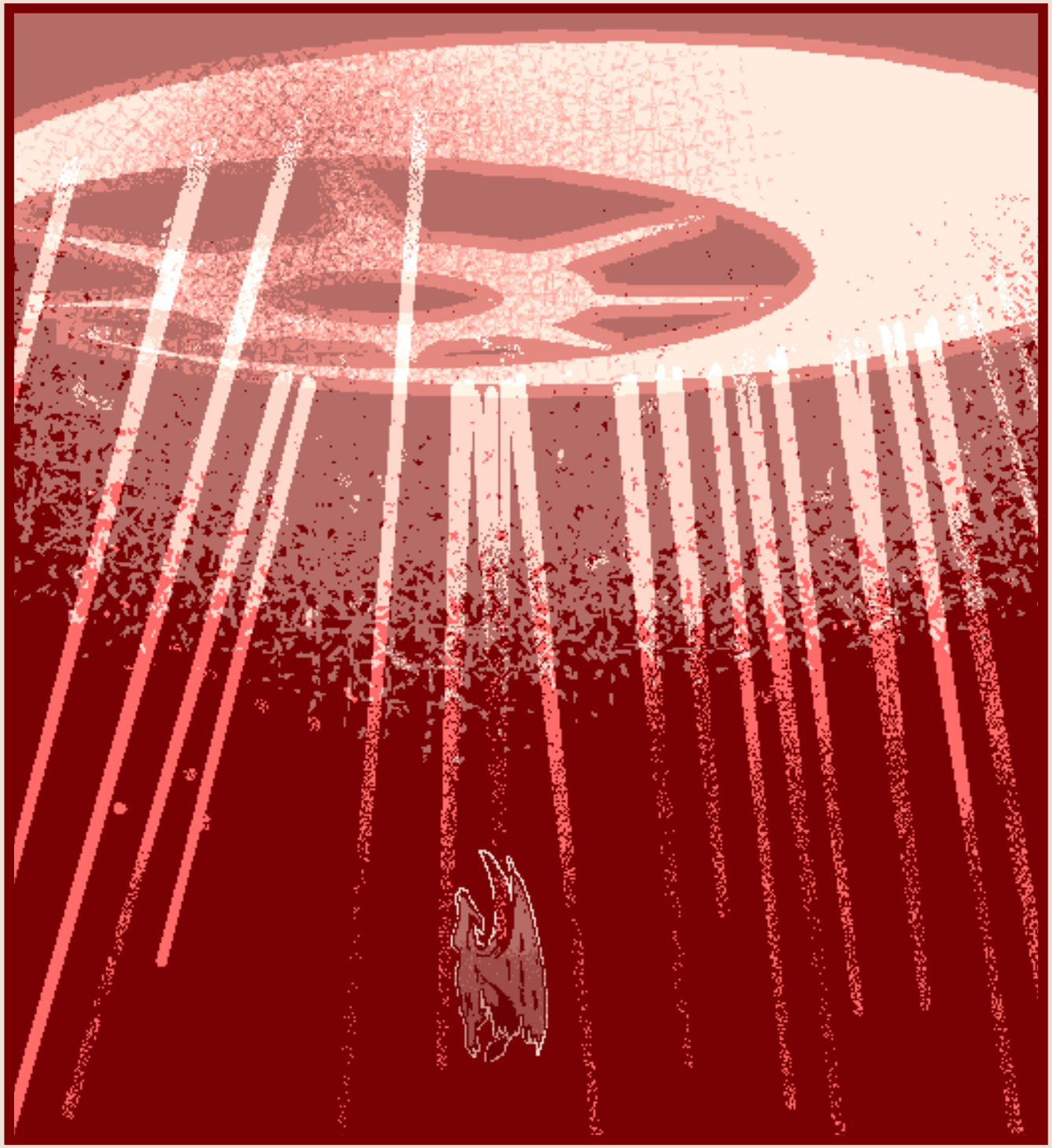
「これが結末か…。」
　勇太が霧散し終えた後、光の後方から声が聞こえた。
　デビモンが天に昇っていく輝きを見ながら呟いていた。
　それに、気付いたデビドラモンはデビモンを吹き飛ばす。
「ほう…理性を失っていないのか。」
「あばれるだけじゃない！もうデビドラモンはじぶんをみうしなわない！勇太とヴォ―ボモンがつないでくれたもので、こんどこそ光をまもる!!」
　光がゆっくりと立ち上がりデビモンを見る。
「実に虚しいな鬼塚 光。
　現実に希望を頂き、手を伸ばした瞬間に文字通りその希望は手をすり抜けた。
　これが、現実だ…ただ、虚しいだけ。
　我々と同じだ、過酷な環境で全てが死を運ぶダークエリアから逃げおおせたと思えばデーモン様は死に、要のオグドモンも本体のここが消えれば DW 全てのオグドモンも消える。
　末路は天使からの粛清だ。」
「…。」
「どうだ、まだ間に合うぞ。
　我々もデーモン様の意志を継ぎ、天使共に対抗するために。
　お前達がまたコアとなれば全てを夢の世界で取り戻せる。」
　光は一度目を塞ぎ、これまでの事を想起する。
　両親、勇太の顔を思い出し、瞼を開け、デビモンの目を見据え答えた。
「断るわ。」
「…なぜだ？お前には、何が残る？」
「大切なものはずっとここにあったのよ…私は馬鹿だから、パパと勇太が教えてくれるまで気付けなかった。」
「光…。」
　ヴォ―ボモンが呟く。
「思い出…いや、心か。
　くだらないなそれがなんの救いになる？」

「それでも！私は…私達はこれで未来へ進める!!!自分を信じれる!!!！」
　光の声に呼応するようにデジヴァイスが輝きを放つ。
「いくわよ…！」
「うん！」
　呼び掛けに呼応するように劇しい輝きが放たれる。
　今まで表示されてこなかったディスプレイには多様の言語であったが、ただひとつ刻まれていた。

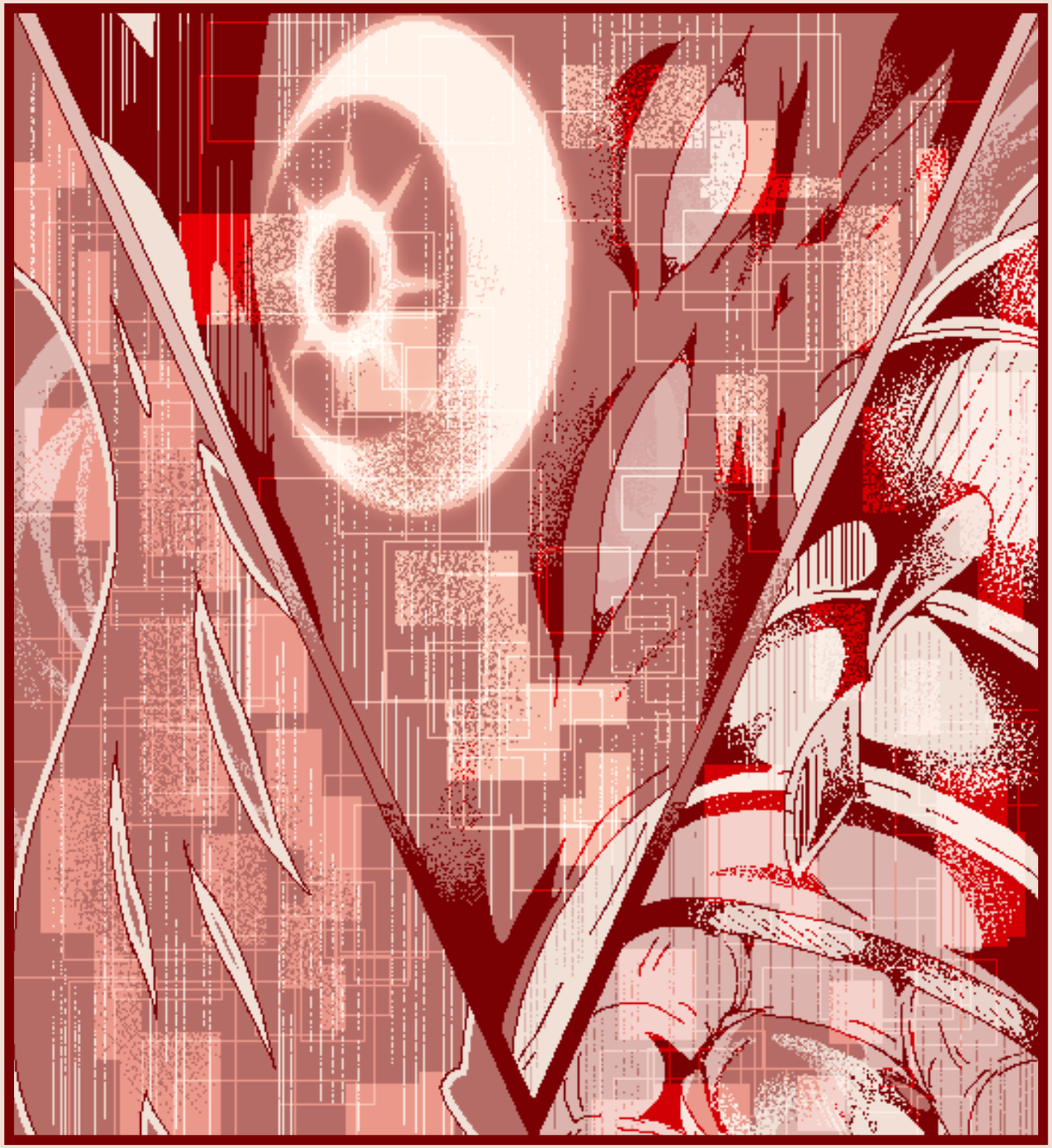
『進化』

「「デビドラモン！ワープ進化!!!！」」

　光がデジヴァイスを構えると、デビドラモンのテクスチャが剥がれ身体から眩い輝きを放ちはじめた。
　　黒い翼が、音もなく震えた。
　デビドラモンの足元から、今度は輝きではなく、どす黒い闇が噴き上がる。
　裂けた口、無数の赤い瞳――禍々しいその姿の輪郭が、徐々に崩れ始める。
　皮膚は煤のように砕け、翼の一枚一枚が闇の羽根となって千切れ飛び、やがて全身が黒い粒子の吹雪となって宙へと舞い上がっていった。

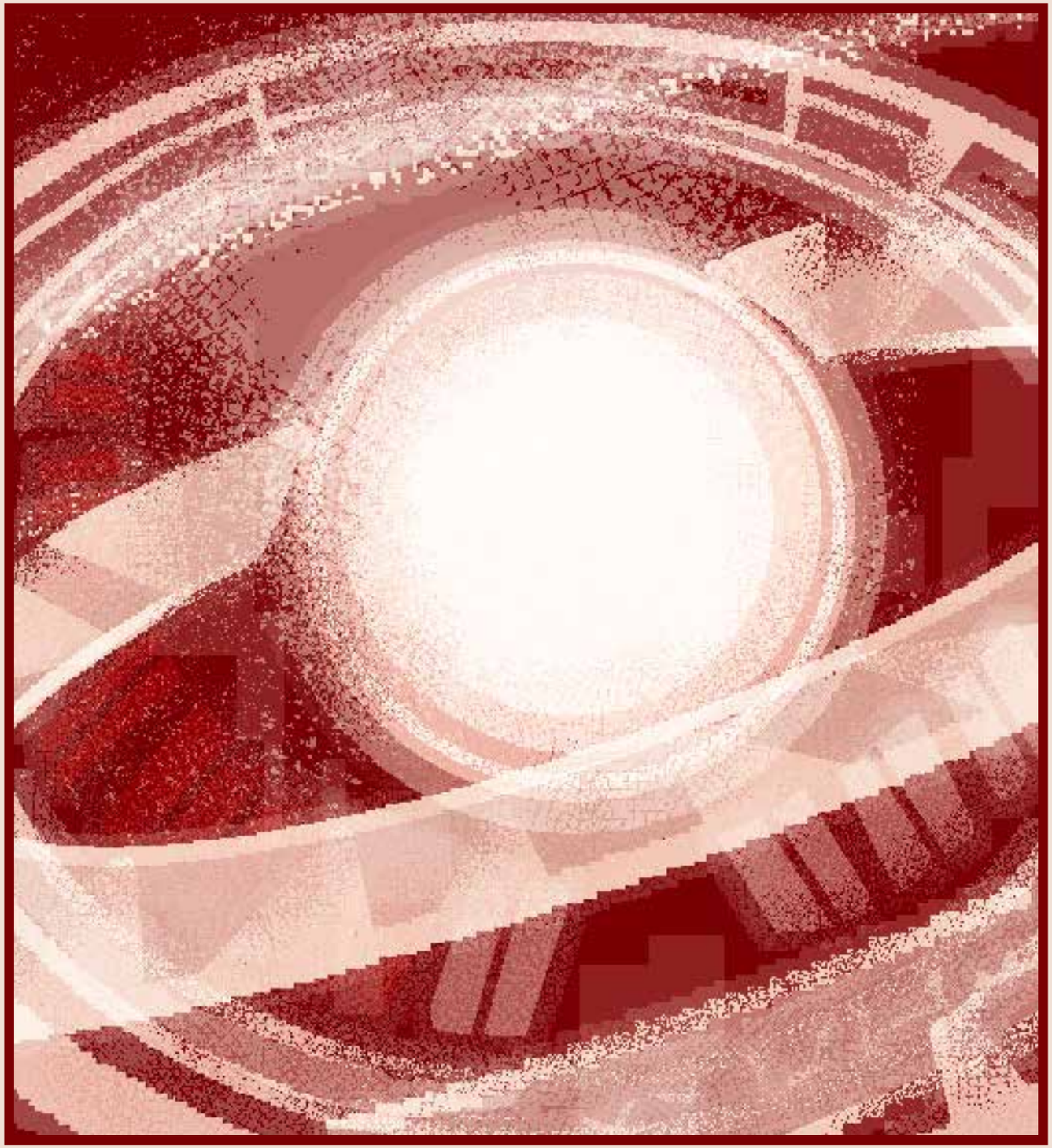


世界が、静まりかえる。
真っ暗な虚空の中央に、ぽつりと、淡い光の粒が現れる。さっきまで闇に呑まれていた空間を、逆流するように光の紋章めいた輪が走り、黒い粒子を一つ残らず巻き込んでいく。
そこに向かい、デビドラモンが静かに昇っていく。



23

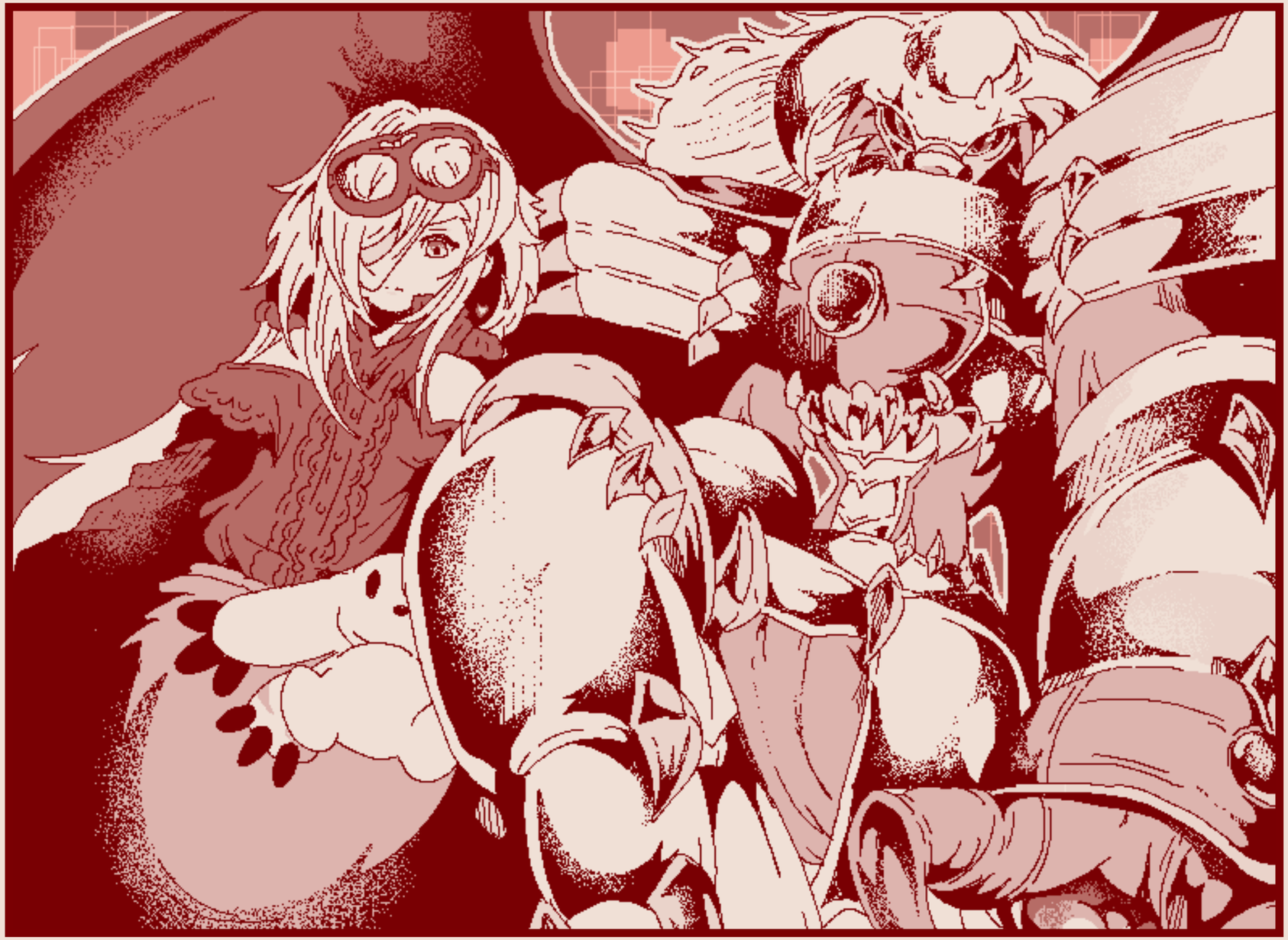
　重厚な脚部の装甲が組み上がる。白銀のプレートがひとつ、またひとつと嵌まり込み、その上を紫の紋様が滑るように走っていく。
　胸部には十字にも似た紋章が浮かび、黄金の縁取りが光の中で鋭く輝く。
　折れた角のようだったデビドラモンの頭部は、鎧兜に似たヘルムへと姿を変え、その中で双眸の光が静かに目を開けた。



世界が、静まりかえる。

真っ暗な虚空の中央に、ぽつりと、淡い光の粒が現れる。さっきまで闇に呑まれていた空間を、逆流するように光の紋章めいた輪が走り、黒い粒子を一つ残らず巻き込んでいく。

闇の吹雪はひとつの渦となり、光球となり、その中心が鼓動した。



渦の中から、輪郭が形を取り始める。
背中に広がるのは、もう黒い翼ではない。
幾重にも重なる光の羽根が展開し、その一枚一枚が固い装甲と同時に柔らかな輝きを帯びて揺らめく。
その両腕に宿る力は、さっきまでの狂暴さではなく、厳かな威圧感と揺るがぬ決意だった。
かつてデビドラモンの姿は今やすべて、その身を守る光の鎧へと変わっている。

最後の黒い粒子が光へと還った瞬間、
虚空に残ったのは、騎士のごとき堂々たる巨体だけだった。

「崇高なる忠義の騎士よ！忠義と信義を鎧となし、飛竜の力で戦場を駆けろその信念を今示せ！」

『これが私達の選んだ答え!!!究極体!!
聖なる竜騎士!!!デュナスモン!!!!!!』

そこには、鎧を纏った聖なる騎士の姿があった。